

文化財調査委員会

調査目録及び解題

曹洞宗文化財調査委員会

No. 376

四七四 秋田118 禅林寺 にかほ市院内字城前七五（令和元年九月一二日調査）

山号は賀祥山、本尊は釈迦牟尼仏、本寺は金沢市長坂町の大乗寺。開山は直翁呈機（一

三〇七～一四一六）、開基は由利太郎維安（一一三九没、由利院殿青山岑陽上座）。

草創は平安時代の天長年間（八二四～三〇四）。迦葉庵という名の真言宗寺院として開創されたと伝えられている。その後、保安年中（一一二〇～二四）由利維安によって中興され、さらに応永年間（一三九四～一四二八）直翁によって改宗された。直翁は、明峰素哲（一二七七～一三五〇）、玄路統玄（未詳）、宝山宗珍（一三九五寂）と続く明峰派の四代目の祖師で、由利地方に巡錫して七ヶ

寺を開創したという。当寺の場合、旧跡の名称を山号に受け継いで禅林寺と改称された。なお、当寺において示寂した直翁は世寿一一〇歳であった。

五世松山呈音（一四七五寂）代には、由利十二頭仁賀保氏の祖とされる大井伯耆守友孝（一四三四～一五〇三、仙自院殿寿永玄長大居士）が帰依し、当寺は仁賀保氏の菩提所となった。なお、現在地に移転建立されたのは慶安四年（一六五二）。宝暦七年（一七五七）に焼失し、明和四年（一七六七）に現本堂が再建されたという。また、江戸期には僧録寺院として羽後仁賀保をまとめ、孫末までを含め一六ヶ寺の門葉を擁していた。地藏尊木、古仏木像、十王像は市指定文化財。



禅林寺本堂

〔絵画〕

1 出山釈迦図 全底喝宗賛 一幅

雪山での苦行に終止符を打ち、裸足で山を出る釈尊の姿を描く。画賛は当寺三三世喝宗（一八六七寂）によるもので「後昆模範、末世津梁、一場欲闕、恩大難酬、遠孫八十老喝宗敬賛」。軸裏に「明和二年乙酉年」の為書きと「賀祥山禅林寺什物幻住突山誌」と記されるので、本紙は明和二年（一七六五）時に書かれたものであろうか。ただ突山が当寺二世突山癡兀（一七五二寂）とすれば若干年代に齟齬が生じる。

2 涅槃図 彩色 一幅

腕枕をする頭北面西右脇臥の釈尊を多数の仏弟子達や動物が囲む第二形式の涅槃図。箱書には万延元年（一八六〇）一〇月に表装を改めたこと、その際の費用や、施主の名前、そして当時現住だった三四世天明智眼（一八七九寂）の名がある。

3 楊柳観音図 伝呉道子画 絹本・彩色 一幅

正面を向き、頭頂には宝冠、胸もとはは纓絡をかけ、右足を下ろす半跏坐像。右手は右

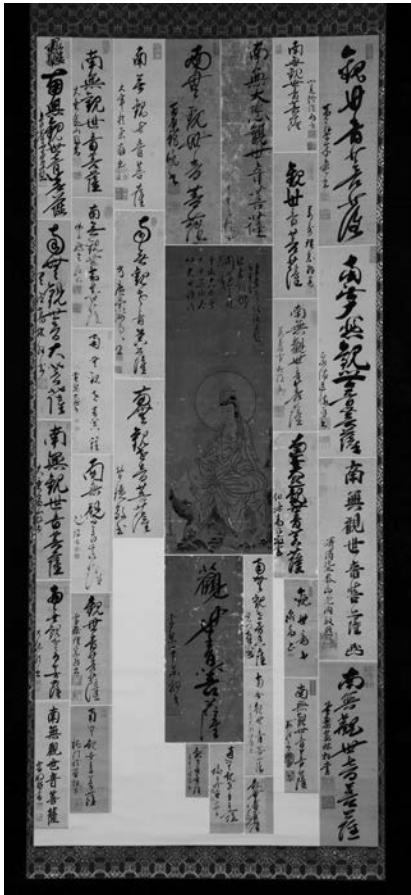
膝の上に置き、左手は地を支えている。呉道子（六八〇頃〜七五〇頃）の画とされる。呉道子は唐代の画家で、後に呉道玄と改名。箱中には、丙午の伝呉道子画極札、甲寅（安政元年へ一八五四）七月の住吉内記弘定（一七九三〜一八六三）による鑑定書、明治三九年（一九〇六）一二月の由利公正（一八二九〜一九〇九）からの寄附状、明治四〇年一月、内務大臣原敬に宛てた「国宝指定願」、「国宝指定願ニ対スル願」を収める。

4 三十三観音 一幅（三三枚）

本紙の中央には後掲の②観音図を配し、それを囲むように観世音菩薩の名号三三枚を貼付する。名号は、一七〜八世紀に活躍した曹洞宗や黄檗宗の名僧が揮毫したもので、横は七列、縦は三段から六段という配列で並んでいる。通常、本目録では、観音図は絵画、名号は墨蹟に分類しているが、ここでの本資料は絵画の項目に分類して収録する。軸裏には「三十三観音」とある。

(1) 木庵性瑫筆 「観世音菩薩」 一枚

(1) 〇〇を貼り混ぜ。



〔絵画〕 4 三十三観音

筆者は黄檗宗萬福寺（京都府宇治市五ヶ庄）二世（二六一一〜八四）で江戸前期に明から渡来。福建省の人。「黄檗木庵書」と署名。右一列、上から一枚目。

(2) 泉流道憐筆 「南無大悲観世音菩薩」一枚

筆者は由利本荘市日役町の泉流寺二世（二七六八寂）。「泉流道憐拜書」と署名。右一列、上から二枚目。

(3) 泰山筆 「南無観世音菩薩」一枚

「崎陽比丘泰山老衲敬題」と署名。右一列、上から三枚目。

(4) 慧林性機筆 「南無観世音菩薩」一枚

筆者は萬福寺三世（一六〇九〜八一）で、江戸前期に明から渡来。福建省の人。「黄檗慧林拜書」と署名。右一列、上から三枚目。

(5) 澄潭広月筆 「南無観世音菩薩」一枚

「心定澄潭拜書」と署名。右二列、上から一枚目。

(6) 璞宗元宝筆 「観世音菩薩」一枚
「萬寿璞宗拜書」と署名。黄檗宗萬寿寺

（仙台市青葉区高松）の

世代であろうか。右二列、上から二枚目。後掲⑦も璞宗の筆。

(7) 雪村道香筆 「南無観世音菩薩」一枚

筆者は黄檗宗萬寿寺二世（一六五二〜一七一

八）で、渡来僧の高泉性激（一六三三〜九五）の法嗣。「萬寿雪村敬書」と署名。右二列、上から三枚目。

(8) 仙林高存筆 「南無大悲観世音菩薩」一枚

「仙林高存敬書」と署名。右二列、上から四枚目。

(9) 潮音道海筆 「観世音□□」一枚
筆者は黄檗宗不動寺（群馬県甘楽郡南牧村）住持（一六九五寂）。「潮音書」と署名。右二列、上から五枚目。

(10) 白崖無明筆 「南無観世音菩薩」一枚

筆者は黄檗宗梅龍寺三世（一六七二〜一七五〇）。「梅龍無明拜書」と署名。右二列、上から六枚目。



〈絵画〉4(12) 観音図

(11) 無常子筆 「南無大悲観世音菩薩」一枚

「無常子謹書」と署名。右三列、上から一枚目。

(12) 観音図 仙巖画・休手賛 淡彩 一枚

岩座に半跏踏み上げて坐す遊戯坐の像で、『観音経』の文字で線描する経文絵画。画賛は「以大士経、絵大士容、水今干水、空今于空、咦、円通三昧、触処玲瓏。付弁度、栗霖吉月住休手題」とあり観音の経文をもつてその像容を描いたとする。

「信陽河東小比丘仙巖叟拜図」という署名から、筆者は萬福寺一九世の仙巖元嵩（一六八四〜一七六三）か。賛者は未詳。右三・四列、上から二枚目で本紙の中央に位置する。

(13) 一字覚門筆 「南無観世音菩薩」 一

枚

「覚門拜書」と署名。右三列、上から三枚目。

(14) 花蔵大洞仙筆 「南無観世音菩薩」 一枚

「花蔵大洞仙筆」と署名。右三列、上から四枚目。

(15) 象先元歴筆 「観世音菩薩」 一枚

筆者は黄檗僧（一六六八〜一七四九）。署名は「如々」で如々子は号。江戸本所の天恩山羅漢寺住持（羅漢寺は廃寺となり、現在は曹洞宗〈東京都江東区大島〉。右三列、上から五枚目。

(16) 独吼性獅筆 「南無観世音菩薩」 一

枚

筆者は黄檗僧（一六八八寂）で福建省の人。隠元に随行し、萬福寺塔頭漢院を創建した。「黄檗独吼書」と署名。右四列、上から一枚目。

(17) 千呆性佞筆 「観世音菩薩」 一枚

筆者は萬福寺六世（一六三六〜一七〇五）。「黄檗千呆拜書」と署名。右四列、上から三枚目。

(18) 行寧性香筆 「南無観世音菩薩」 一

枚

筆者は仙台市青葉区北山の輪王寺二一世（一七四九寂）。「輪王性香敬書」と署名とするので輪王寺時代の揮毫。右四列、上から四枚目右側。後掲（26）は輪王寺退董後の性香の筆。

(19) 仁峰元善筆 「観世音菩薩」 一枚

筆者は黄檗宗仏国寺（京都市伏見区深草大亀谷敦賀町）一〇世（一六五八〜一七三〇）。「槩林仁峰拜書」と署名。右四列、上から四枚目左側。

(20) 扶桑元暎筆 「南無観世音菩薩」 一

枚

「大乘扶桑元暎拜書」と署名。大乘寺（金沢市長坂町）の役僧であろうか。歴代住持にその名は見えない。右五列、上から一枚目。

(21) 方広蘭洲筆 「南無観世音菩薩」 一

枚

「方広蘭洲筆拜書」と署名。右五列、上から二枚目。

(22) 智鏡筆 「南無観世音菩薩」 一枚

「智鏡敬書」と署名。右五列、上から三

文化財調査委員会は、宗門寺院が保有する典籍、文書、絵画等の文化財の破損散逸をふせぎ、保存の処置を講ずるために、調査を行うとともに、その結果を『曹洞宗報』誌上に公表しております。

本掲載資料の中には今日の人権擁護の見地からみて、およそ容認し得ない差別思想を含んだものも存在しています。それらについては、そのつど注意書きを付しておりますが、これは宗門の歴史の実態をあきらかにするための資料としてあえて掲載するものであり、その点、十分にご理解をいただけますようお願い申し上げます。

特に「切紙」中、「部落差別」「障害者差別」「性差別」等の内容については、差別文書でありますので、当該寺院及び資料閲覧者におかれましては、人権擁護・反差別の見地に立って厳重に保管し、差別の拡散、助長になりませぬよう重ねてお願いいたします。

（出版部）

枚目。

② 密山道頭筆 「南無観世音菩薩」 一枚

筆者は大乗寺二九世（一六五二〜一七三六）。「大乘密山敬書」と署名。右六列、上から一枚目。後掲③も密山の筆。

④ 黙室道轟筆 「南無観世音菩薩」 一枚

筆者は黄檗宗佛日寺（大阪府池田市畑）三世（一六五一〜一七三五）。「佛日黙室拜書」と署名。右六列、上から二枚目。

⑤ 大鵬正鯤筆 「南無観世音菩薩」 一枚

筆者は萬福寺一五・一八世（一七七四寂）で福建省の人。「黄檗大鵬書」と署名。右六列、上から三枚目。

⑥ 頑極官慶筆 「南無観世音菩薩」 一枚

筆者は長崎県諫早市西小路町の天祐寺二〇世頑極頑慶（一六八二〜一七六八）。「頑極書」と署名。右六列、上から四枚目。

⑦ 璞宗元宝筆 「観世音菩薩」 一枚

右六列、上から五枚目。「霊嶽璞宗拜

書」と署名。右六列、

上から五枚目。前掲⑥も璞宗の筆。

⑧ 行寧恹菴筆 「南無観世音菩薩」 一枚

筆者は仙台市泉区山の寺の洞雲寺独任一世行寧恹菴（一七四九

寂）。「龍門恹菴拜書」と署名するので、洞雲寺時代の筆。龍門山は同寺の山号。前掲⑧は当寺入寺前の輪王寺時代の筆。右六列、上から六枚目。

⑨ 「南無観世音菩薩」 一枚

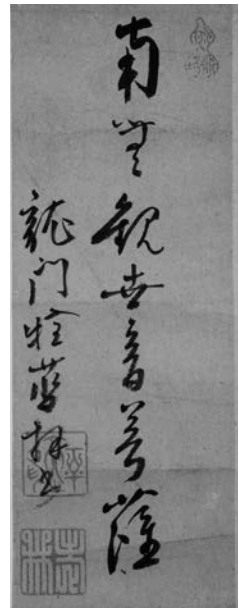
雪峰大覺筆。筆者は宮城県石巻市羽黒町の永巖寺八世（一七六〇寂）。「長常雪峰敬書」と署名。右七列、上から一枚目。

⑩ 高林観照筆 「南無観世音大菩薩」 一枚

筆者は秋田市泉三獄根の天徳寺二五世（一七五三寂）。「天徳高林拜書」と署名。右七列、上から二枚目。

⑪ 密山道頭筆 「南無観世音菩薩」 一枚

〈絵画〉 4 ⑧ 行寧恹菴筆



筆者は大乗寺二九世で「大乘密山敬書」と署名。右七列、上から三枚目。前掲⑧も密山の筆。

⑫ 大仙筆 「南無観世音菩薩」 一枚

「大仙書」と署名。右七列、上から四枚目。

⑬ 霊明筆 「南無観世音菩薩」 一枚

「霊明拜書」と署名。右七列、上から四枚目。

⑭ 十六善神図 絹本・彩色 一幅

中央に釈迦如来、脇侍として右に青獅子に乗る文殊菩薩、左に六牙の白象に乗る普賢菩薩、文殊の下には合掌手の常啼菩薩、普賢の下には僧形で合掌手の法涌菩薩、下段左右には深沙大将と女婁三蔵、それを囲むように十

六善神(四天王・十二神将)の八名ずつを左右に配す図。年代未詳。

6 羅漢図 九皇藤寿画・賛 彩色 一幅

文化壬申年(九年一八二二)夏日。作者の九皇藤寿は未詳。長い数珠を左手に持ち岩座に腰掛ける像。画賛は「問不二門、口唾舌秃、犬吠枯禱、賊入空屋」。

7 羅漢図 絹本・彩色 一幅

偏袒右肩で法衣を着し、両手で経文の軸を開いて椅子に座る、円形光背を持つ羅漢と、その右に立ってうつわを持つ侍者の画像。無賛。筆者は未詳。

8 達磨図 峰隆画 彩色 一幅

赤達磨図。軸裏には「達磨(赤衣)」とある。無賛。だが峰隆の落款あり。峰隆については未詳。

9 梅華図 梅省画 彩色 一幅

左下から右上に伸びる、白梅を咲かせた枝振りを描く。「梅省時八十歳」という署名から八〇歳の時の画となるが、作者については未詳。

10 宝珠図 西有穆山画・賛 一幅

穆山は總持寺独住三世穆山瑾英(一八二一〜一九一〇)。大小五つの宝珠と画賛「福寿

如意」。〔總持穆山八十老衲〕という署名より明治三年(一九〇〇)の揮毫。

〈墨蹟〉

1 月舟宗胡筆 「南無阿弥陀仏」 一幅

筆者は金沢市長坂町の大乗寺二六世中興(一六九六寂)。

2 覚海眞禪筆 「賀祥山」 一枚(無表装) (右側欠)

後掲〈聯・額〉1の原書で右から横書きに大書する。筆者は大乗寺五〇世(一八二八寂)。

3 星見天海筆 竜天・白山 一幅

「龍天護法大善神、白山妙理大権現」と大書し、中央に「最乗天海敬書」と署名する。筆者は神奈川県南足柄市大雄町の最乗寺独住四世天海皎月(一九一三寂)。箱書に「南無阿弥陀仏、月舟禪師書」とあるので、箱は前掲〈墨蹟〉1のもの。

〈聯・額〉

1 覚海眞禪筆 「賀祥山」 山門額 横額一面(彫刻)

前掲〈墨蹟〉2は原書。筆者は金沢市長坂



〈墨蹟〉2 覚海眞禪筆「賀祥山」

町の大乗寺五〇世（一八二八寂）。

2 月潤義光筆 「禪林寺」本堂外陣額 横

額一面（彫刻）

筆者は富山県氷見市丸の内の光禪寺一九世

（一七〇二寂）。

3 頑極官慶筆 「華藏海」本堂内陣額 横

額一面（彫刻）

筆者の頑極頑慶（一六八三〜一七六七）

は、滋賀県長崎町早市西小路町の天祐寺二

〇世。

4 鉄籃無底筆 「照鑑」・「嫩桂」堂内額

横額二面

本堂内陣東序側に、大権修利菩薩（右側）

と達磨大師（左側）が安置されており、その

上部に二面を掲額する。筆者は大乗寺五四世

鉄籃無底（一八四四寂）。

(1) 「照鑑」 横額一面（彫刻）

右側の大権修利菩薩の頭上に掲額。照鑑

は明らかに見ること、右手を額に当てて

遠方を望む大権の姿であろうか。

(2) 「嫩桂」 横額一面（彫刻）

左側の達磨大師の頭上に掲額。嫩桂は嫩

（ふたば）の桂（かつら）の意で、久しく

昌（さか）えること。また、嫩（わかい）

少ない）、桂（はやし）で、達磨が住した
少林寺を暗に指す語。

5 卍山道白筆 「通霄路」 横額一面（彫

刻）

筆者は大乗寺二七世復古卍山道白（一六三

六〜一七一五）。

〈金石文〉

1 林廿二世墓塔 一基

当寺二二世は通岸察禪（一七四五寂）。

「林廿二世坐」と直接石盤に彫刻する。墓域

には、開山塔（無縫塔、一基）や開基「由理

太郎墓」（二基）、仁賀保家の五輪塔（二

基）がある。

2 殿鐘 一口

北原金左衛門藤原姓将盈作 突山癡兀誌

宝曆七年（一七五七）五月、突山は当寺二

三世（一七五二寂）。铸物師の将盈は、本荘

藩のお抱え铸物師で北原金左衛門の三代目に

当たる。熊谷恭孝『近世秋田の铸物師と梵

鐘』（POB出版、平成二九年）の八六頁所

収。

3 雲板 一面

享保四年（一七二九）中春。当寺二世報

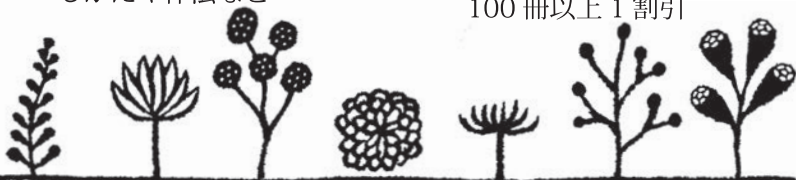
曹洞宗宗務庁

リーフレット（B6判中綴じ）

『ご法事の前に』

法事の際の寺院への連絡の
しかたや作法など

1冊 **88** 円
100冊以上 1割引



養親（一七二五寂）代に、安住正心沙弥菩提のため鑄造されたもの。

〈その他〉

1 七観音坐像 七軀

仏師須藤祐正作 開眼師實道

嘉永六年（一八五三）四月、中央に聖観世音菩薩、右側には上から千手観音、如意輪観音、楊柳観音、左側には上から十一面観音、準胝観音、馬頭観音の各坐像を厨子に納める。開眼師として記されている「玉窓現任實道」は寺人名ともに未詳。

2 十王像 一〇軀

初七日から三回忌にいたる十仏事において、死者の生前の行いを審判する閻魔王をはじめとする冥界の十王の坐像。一木造り。彩色の形跡はあるが、面貌や服装をはじめ像全体が摩耗して木肌があらわになっており、作成当時の像容は不明である。また、わずかに道帽に書かれた文字が見えるものもあるが、判読することは出来ず、それぞれの王の名称は未詳である。この中の一軀は、観世音菩薩のように施無畏印と与願印を作っているが、観音（百ヵ日）に対応する平等王であろう

か。〈その他〉3・4とともに本堂内に奉安。十王像（二〇軀）はにかほ市指定文化財。平安時代末期の作と伝えられている。

棟札の表、中央に「奉当寺三世突山癡兀敬白」と大書し、その左右に明和二年（一七六五）二月二十八日と日付を記す。突山は当寺

3 奪衣婆像 一軀

三途の川の対岸で死者を待ち、その衣類を奪い取る奪衣婆。片膝を立てた坐像。一木造り。〈その他〉2・4とともに本堂内に奉安され、像容は酷似している。

4 某立像 一軀

一木造りの立像。全体的に摩耗しており像容ははっきりしない。奪衣婆とともに三途の川の対岸で死者を待ち、奪衣婆が奪った衣類を衣領樹という木に懸ける懸衣翁か。

〈その他〉2・3とともに本堂内に奉安され、像容は酷似している。

3 韋駄天像 一軀

合掌手に宝棒を乗せた立像。年代未詳。

4 造立殿堂宇棟札 一枚



〈その他〉3 奪衣婆像



〈その他〉2 十王像

二三世（一七五二寂）。裏の上段には、殿堂建立の経緯が黙音によって謹述されている。それによれば、宝暦二年（一七五二）に祝融にあつて荒廢し、その後復興して宝暦一三年（一七六三）七月には宝殿が再建されたという。経緯に続いて、代官や大工の名が列記され、下段には住僧鋤千、化主龍覚啓白とあるので、当寺二四世大享鋤千（一七九四寂）

が、表面に本師突山の名を記したものが。ちなみに黙音については未詳。なお、宝暦七年（一七五七）に焼失、明和四年（一七六七）の再建という伝承もある。

5 棟札 一枚（右側欠）

寛保二年（一七四二）四月八日。山内諸堂の棟札であろう。当寺二世通岸察禪（一七四五寂）の名が見える。

6 定規 一枚

弘化四年（一八四七）二月二三日、大乘護国禪寺現住黙如より羽州禅林寺壁間宛。黙如は金沢市長坂町の大乗寺五六世冲峯嘿如（一八四八寂）。当寺について、明峰門下直翁が開いた道場で往古より僧録であったということ、配下寺院は永平家訓や瑩山清規によって安居すべきこと、慈悲をもって檀越を教化す

べきこと、出世について、伝法嗣書面授の法について、視蒙など末寺の住持交代の法式について、毎年の開山忌には末寺が上山して法要を勤むべきことなどの七箇条をまとめた定規。本定規の原本は〈文書〉159規定（未解題）。

（以上資料解題寺院解説 主事 伊藤良久）

本誌掲載資料の閲覧等について

本誌および、『曹洞宗文化財調査目録解題集』に公表された資料の閲覧ならびに複製を希望する場合には、お問い合わせの上、所定の書式によって申請してください。

○お問い合わせ先

〒一五四―八五二五

東京都世田谷区駒沢一―二三―一

駒澤大学内

曹洞宗文化財調査委員会事務局宛

電話・FAX ○三一六四三二―一五一―

寺族相談窓口のご案内

匿名で結構です。みなさまの日ごろのお悩み、困っていること、お寺の手続きで分からないこと。何でもご相談ください。

受付時間 宗務庁執務日の9：30～16：30

電話 03-3454-2620

e-mail jizoku-mado@sotozen.jp